

## 統一テーマ「ロマンス語と日本語の対照」

司会 菅田茂昭

Shigeaki SUGETA

### § 1 はじめに

日本ロマンス語学会第 84 回 (2010 年度) 大会の統一テーマは「ロマンス語と日本語の対照」であった。

岡見、福寫、寺崎、町田、Hamciuc、菅田の 6 名が個別のロマンス語と日本語の比較をパネリストとして発表 (持ち時間、各 20 分) し、休憩を挟んで質疑応答のための総合討議 (60 分) が菅田司会のもとで行なわれた。各発表の主旨と総合討議での質疑について以下紹介する。

### § 2 発表の趣旨と総合討議での質疑

各発表の主旨は以下のようなものであった。

1. 岡見友里江 (愛知県立大学) 「日本語とスペイン語における形容詞カテゴリーの展望」は、品詞カテゴリーとしての形容詞を、そのプロトタイプと二つの機能を提示し、普遍的な視点が日本語やスペイン語など個別言語の研究にどのような帰結をもたらすかを論じた。
2. 福寫教隆 (神戸市外国語大学) 「スペイン語の主題に関する一考察 ―日本語との対照を通じて―」は、助詞「は」で表わされる日本語の主題に対して、スペイン語では有標語順や疑似分裂文など文レベルの手段が対応することを指摘し、ことにスペイン語の口語で見られる *Yo lo que quiero es una bicicleta.* のような疑似分裂文の中の要素をさらに主題化した構文をとりあげ、日本語と関連させながら検証した。
3. 寺崎英樹 (神奈川大学) 「スペイン語と日本語の推量モダリティ表現 ―動詞とモダリティ副詞との共起関係を中心に―」は、モダリティ表現には両言語ともに文法的手段 (動詞) と語彙的手段 (副詞) とがあるが、これらの表現手段が重ねて用いられる場合の意味の相違と制約を統計的に裏付けようとするものであった。
4. 町田健 (名古屋大学) 「フランス語と日本語の時制・アスペクト機構」は、日本語では {i} が部分相を、{ru} と {ta} がそれぞれ過去・非過去時制を表示するのに対して、フランス語では全体・部分のアスペクトを区別する特別な形式はなく、アスペクトの区別が明示的となるのは、過去時制に関して、複合過去と単純過去が全体相を、半過去が部分相を表示するに過ぎないことを指摘することにより、フランス語は時制表示を優先する言語であり、日本語はアスペクト表示を重視する言語であると言えるという結論に導いた。
5. Monica Hamciuc (立命館アジア太平洋大学) 「日本語とルーマニア語オノマトペの統語的特徴について」は、ルーマニア語ではオノマトペは自然界の音に基づく語彙を指すのに対して、日本語ではこれにいわゆる擬態語も加わる点に注目する。ルーマニア語からの豊富な具体例の提示のあと、日本語「… (す

る)」タイプとルーマニア語の「(face) …」タイプの比較を試みている。

6. 菅田茂昭 (早稲田大学)「イタリア語 vs 日本語」は、類型論的比較の限界について述べたあと、主要な基準 (正書・音声レベルから形態・統語、語彙レベルまで) に基づき、類似と差異にわたる論点の列挙を試みた。最後に方言区分についても両言語間に偶然にも類似点が見られることを指摘した。

これに対して活発な質疑が行われたが、そのいくつかを以下に紹介する。質問者の氏名は省略した。回答には氏名 (敬称略, 発表者の場合は姓のみ) を付してある。

- ・スペイン語の疑問文¿A quiénes viste en el teatro? に対する答え方として A tus padres, vi en el teatro. が挙げられているが、一般的には Vi en el teatro a tus padres.のように a tus padres は動詞の後にくるのが普通で、左にくるのは focalization である。スペイン語では疑問文に対する答えが動詞の左側に、つまり focalization の位置で答える話者がいるということか。

(回答)

この文は Salvador Gutiérrez Ordóñez の書物から引用した作例である。確かに、大事なところを前に出すというのはなんとなく変な感じがする。実際には A tus padres. で十分で vi en el teatro という余計な情報は言わないことが多いと思う。(福蔭)

- ・日本語には、重層主語がなく、スペイン語にはあるというのはどうしてかという議論に関して、例文のひとつでは A mí というのが来ている。A mí のようなタイプの重層主語の例文は、数としては多いのか? それともマイナーなのか? さらに、これに関連して Yo lo que me parece という言い方はあるか。

(回答)

A mí のようなタイプの重層主語の例文はマイナーで、実際には主語が多いものの、間接目的語も可ということである。また、Yo lo que me parece のようなタイプの逸脱表現は口語ではよく見られる。A mí me gusta は重層主語ではないが、Yo me gusta... (私は～が好きです) などは会話でよく用いられる。(福蔭)

- ・イタリア語の A Gianni, Maria gli ha parlato recentemente. の gli は自由だが、これは左方転位したのが間接目的語だからで、直接目的語では必ず繰り返される。たとえば、Questo libro Maria l'ha comprato. の lo がなくなったら非文である。スペイン語ではどうなのか。また、A mí me cuesta. のようなクリティックの繰り返しはスペイン語では随意的ではなく、必須なのか。

(回答)

A mí me cuesta. は代名詞と代名詞なので必須である。代名詞でない場合、左方転位の場合には間接目的語と直接目的語で特にスペイン語で差はないと思う。間接目的語あるいは直接目的語が前に出て

きたら、もう一度代名詞で受けるのがスペイン語の原則である。間接目的語と直接目的語でちがいが出るのは、右方転位の場合で、たとえば *Le dije a la niña* のように後から *a la niña* を持つてくる。このように右方で、クリティックと重複させる方法が間接目的語では可能だが、直接目的語の場合では、アルゼンチンやウルグアイでは可能だが、標準スペイン語では一般的ではない。(福嵐)

- ・スペイン語の *Es probable* の後に接続法が来ているが、フランス語の場合は教科書的には未来形で、実際には接続法もよく使われる。*possible* の場合は接続法で少し違ってくる。スペイン語ではどうか。また、副詞の形で *probablemente* と *posiblemente* が出ているが、同じような傾向があるのか。

(回答)

*es posible* と *es probable* はちょっと違う。*es posible que* なら間違いなく接続法であるが、*probable* の場合は接続法ではない場合もある。*es probable* と *probablemente*、*es posible* と *posiblemente* の後に来る動詞の法は、それぞれだいたい一致するはずであるが、*que* 節の方が接続法が起きやすい。ただし、*seguramente* は明らかに *es seguro que* とはかなり違う。*seguramente* のほうがより確信度は低く、*es seguro que* はかなり確定的な感じがある。(寺崎)

- ・例文の *Probablemente Juan pueda venir aquí* と *Quizá Juan deba venir aquí* に関連して、一般に副詞の方が *epistemic* であれば、*poder* や *deber* の方は *deontic* というのが通説になっている。ところがフランス語で調べたところ、*probablement* と *devoir* が共起するケースがいくつか見られ、同じ程度の確信を表す *peut-être* と *pouvoir* が共起するケースも見られる。スペイン語ではそういうケースが存在するか。さらに、そういうケースはおそらく *redundancy* で、語順で先に出てくる方が重要なモダリティー役割を表していると思うが、いかがお考えか。

(回答)

今回は用例には出してないが、実際に *probablemente*、*posiblemente* と *poder*、*deber* が共起している例はある。それで *deontic* なのか、それとも *epistemic* なのか、ちょっと判断が迷うようなケースはある。これから検討させていただきたいと思う。(寺崎)

- ・未来形はフランス語の位置づけでは時制として扱われている。スペイン語の発表では未来形は *conditionnel* と並べ、別のモードだとされている。時制として未来を認めないその根拠はなにか。

(回答)

ひとつは形態的、統語的な面である。起源的には未来形は義務を表すモダリティー的なものから時を表す時制に変化したという歴史がある。一般に、欧米の学者はなるべく時制で体系を説明しようとする傾向が強い。しかし、スペイン語に限らず、ロマンス語すべてで基本的には過去と非過去の2項対立で説明することが可能で、その枠内で、未来形は過去には入れられないので別のモードと考えた

方がよいと考えている。(寺崎)

もちろん日本語での起源などを考えると、もともと義務が日本語の未来にあったという意見もあるが、基本的にはフランス語でも他の言語でも確定した未来以外は未来形を使う。未来は、現実では発話時点では成立していない事態を表示するので、当然、推測の領域の中に入ることが未来という軸間において成立する事態の本質性で、従って、モダリティー的な意味が未来時制に生じてくる。未来があって、そこに推量などが生じてくるので、それを人間の自然で合理的な推論と考え、未来時制はあると考えている。(町田)

(意見)

未来時制はあったほうがよいと思う。つまり、必ず作られてしまう。ラテン語の *-bo* がなくなっても、しかしまたそういうのが作られる。要するにラテン語の未来形も新しく作られたもので、ギリシア語でも別のシステムで作られる。どうしても未来時制というのは必要なのではないか。(小林標)

未来形について付け加えるが、未来形は必ずできるということであるが、できなかった地域もある。南イタリアの一部の方言では未来形が作られなかった。スペイン語では未来形に制約があり、「もしも～なら」という条件節や「～するときには」という時の節など従属節では使えない。フランス語ではこういうときに未来形を使うが、スペイン語では接続法になる。さらに、ラテンアメリカのスペイン語では未来形は話し言葉ではほとんど使わない。未来形が使われるのは推量の意味だけで、未来の時を表すのに未来形はまず使わない。(寺崎)

イタリア語に関係して、未来形について言うと、やはり枠があるからそこがなくなっても入れ替えていくという傾向も認めざるを得ないと思うが、未来形が現実にもどういう使われ方をしているかについて、イタリアの Padova で取られた統計で、都市部から郊外に何キロ離れるかに従って、だんだんと未来形を普通の会話で使う率が減るというデータがある。ラテン語でもそんな形をローマの兵隊たちがどれほど使っていたかというのは疑問のように思える。(菅田)

### §3 まとめ

ロマンス語と日本語の比較は、ソシユールのことばを借りれば、類縁性内の多様性ではなく、類縁性を欠く絶対的多様性の比較となるが、本学会の統一テーマとしては、初めてとりあげられたものであった。スペイン語からルーマニア語までそれぞれ選ばれた興味深いテーマでの発表であった。外国語としてのロマンス諸語の教育への応用を願って選ばれたテーマであったが、今日では応用言語学から言語教育学という名称のもとに外国語教育方法論は言語学の一部門入りをしている現状である。今後はこの方面での発展が期待されていると言える。